

本日晴れて入学式を迎えられる学部・大学院・助産学専攻科新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。またご家族、保証人、関係者の皆様にもお慶びを申し上げます。新入生を始めとしてご家族、関係者の皆様が、今日、上智の教職員、在校生、卒業生の共同体であるソフィア・ファミリーに加わってくださいましたこと、こころより歓迎いたします。

上智大学は今年創立 110 周年を祝います。創立当初から現在に至るまで国際的な大学という特徴を保持し、また時代の要請に応じてその特徴を新たな形で生かしてきました。海外で活躍する卒業生も数知れず、世界中どこに行っても必ずそこにソフィアンが居るといふほどですし、留学生として上智で学んだ卒業生もソフィアンのネットワークに加わっています。上智が橋渡しとなって世界を結び、出身地域や文化が多様な人々が集い、学び合うこととおして、「他者のために、他者と共に」生きる卒業生を輩出する——これが上智のミッションです。

上智のこの国際性は、創立以来の伝統に由来するものです。上智大学は時の教皇ピウス 10 世から付託を受けたカトリックの修道会「イエズス会」により創立されました。創立に携わった 3 人のイエズス会神父はドイツ人のヨーゼフ・ダールマン、イギリス人ジェームズ・ロックリフ、フランス人アンリ・ブシェーで、それぞれ東洋学の専門家、アメリカ・セントルイスの宣教師、上海のフランス学院院長と、出身も専門も多様でした。上智が国際的であるという意識は、大学が誕生して間もない時期、1932 年に制定された校歌にも表現されています。つまり校歌のリフレインにある「アルマ・マータル」という母校を意味する語句で、当時、欧米の伝統ある総合大学のみがこの「尊敬すべき母」という称号を使っていたので、皆様が校歌を歌うとき、是非、この先輩たちの気概を感じ取っていただきたいものです。

上智大学校歌の制定は、関東大震災で大きな損傷を受けた最初の校舎に代わるものとして作られた新校舎、現在の 1 号館の竣工を祝って歌詞を公募し、哲学科学生の作が採用されたものです。当時の東京は 10 年ほど前に発生した関東大震災の被害に苦しむ厳しい状況にあり、新校舎建設もドイツ、アメリカなど世界中からの援助があつて実現したのですが、ただ受けるばかりではなく、東京に居る、助けを必要とする人々と共に生きる貧困者支援の活動を、学生と教授たちは始めました。国際的な結びの中で人々と共に生きる、という伝統はこうして築かれました。

欧米諸国を中心とする国際的な繋がり、第二次世界大戦終了後の経済復興の時代にあつた上智大学を特徴づけていました。世界数十ヶ国から上智に派遣されたイエズス会神父たちが教え、学生の海外体験を促し、こうして日本に居ながら留学体験をしているようなキャンパスが上智の大きな魅力となりました。

上智の国際性は、世界全体がグローバル化するに応じて、拡大していきました。大きな転機は 1979 年のインドシナ難民救援活動に始まります。それまで欧米中心であつた上智の国際

的活動がアジアへと広がりました。言うまでもなく、それ以前からカンボジアのアンコール・ワット研究など先駆的な取り組みがあり、それらが現在までに開花しました。最近の10年ほどの間に上智の国際性はさらに視野を広げて、国連関係の諸機関との連携、あるいはアフリカからの教授の招聘など、文字どおり世界全体と結ばれる大学となっています。

分断と対立の危惧があるとしても、世界のグローバル化が進むことは確かです。このような世界の中で、私たちは個人として、また人類共同体の一員として、さらには「共通の家である地球」の住民としての使命を持っています。つまり多様な人々や社会を結び、他者のために、他者と共に生きる人となるという使命です。この使命を生きることで、私たちは世界をより善いもの、人間にふさわしいものとするため貢献できるでしょう。今日、晴れて「アルマ・マテル」である上智大学、そして大学院、助産学専攻科に入学された皆様が、やがて学位授与式を迎えられる日には、世界に羽ばたくソフィアンとしての使命を自覚して母校を巣立っていかれることを、期待いたします。

本日はご入学、まことにおめでとうございます。

2023年4月1日

学校法人上智学院

理事長 佐久間 勤